

LEADERS NOW!

先輩を追って跳び、 栄冠をつかむ

2011日本学生陸上競技個人選手権大会
女子走り高跳びで優勝

●体育会陸上競技部 社会学部4年次生
松本 真由子さん

6月19日、日本学生陸上競技個人選手権大会の女子走り高跳びで、体育会陸上競技部の松本真由子さんが、自己新記録を達成して優勝した。高校時代から注目された選手だったが、なかなか力を発揮できなかった。今回の優勝で弾みをつけて、9月の全日本インカレ初制覇へ向けて練習を積み、「1メートル82を跳んで優勝したい」と意気込む。



松本さんは高校時代にインターハイ、国体の2冠に輝いた実力の持ち主であったが、大学入学後は伸び悩んだ。

「高校3年間は、あっという間に駆け上っていき感じがありました。大学入学後の2年間は、けがをしたり体の調子が悪いというわけではなかったのですが、全く記録が出ない状態が続きました。調整方法や筋力を鍛えるところを変えてみたり、考え方を変える本をたくさん読んでいたのですが、だめでした」

飛躍するきっかけになったのは、1年先輩の三村有希さんの存在だった。三村さんは昨年9月の日本学生陸上競技対校選手権大会(全日本インカレ)女子走り高跳びで、3連覇を達成した。同大会同種目で、松本さんは2位になった。松本さんにとって三村さんはあこがれの先輩。「昨年は三村さんの最後の年だったので、絶対にワン・ツーを取るんだという気持ちになったのです」

そして、今年の6月19日、神奈川県平塚市で行われた日本学生陸上競技個人選手権大会。松本さんは1メートル79の自己ベストで、見事優勝を決めた。1メートル73を2回目でクリアすると、目標であった1メートル76を1回で達成。次に自己新記録への挑戦となる1メートル79も、1回で成功させて、栄冠に



松本 真由子—まつもと まゆこ
■1989(平成元)年、岡山県生まれ。岡山県立東商業高校卒業。社会学部4年次生。体育会陸上競技部に所属。2011日本学生陸上競技個人選手権大会女子走り高跳びで優勝。

輝いた。大会新記録の1メートル82は、惜しくも失敗に終わったが、これは大学最後の大会となる全日本インカレへの目標となった。

松本さんの跳躍練習は日曜日。普段は走る練習が中心。「どんなに速く走っても踏切ができなかったら上には跳べないので、自分で走り方をコントロールするリズム走に、意識して取り組んでいます。自分ではゆっくり走っているつもりでも、タイムを見ると速かったりします。例えば、10本中8本ぐらい同じ感覚で走れたら、それがいちばんいい状態です」

松本さんは自分を評して、「集中力は並外れている」という。全国大会クラスの大試合に強い。大きな試合になるほど、好成績をあげ、自己ベストを跳んでいる。プレッシャーを力にできる人なのだ。

「楽しむことがすごく好き。楽しいことをずっとしていきたい。1分間の自分の跳躍時間に入るまで、ライバルともわいわいおしゃべりをしています。そろそろ出番だとなったなら、さっと切り替えて、さあ楽しもう、という感じで行けます」

インタビューの日は、社会人となった三村さんがたまたま母校へ練習に来ていた。焼けつくグラウンドへ飛び出している二人は躍動感に満ち、真夏の太陽に負けないうらい輝いていた。



松本さんが飛躍するきっかけとなった、先輩の三村さん(右・2011年卒業生)は、共に高め合い、刺激しあう仲間

関西発の 経済ジャーナリズムを担う

野次馬根性で経済界と北新地を駆け巡る

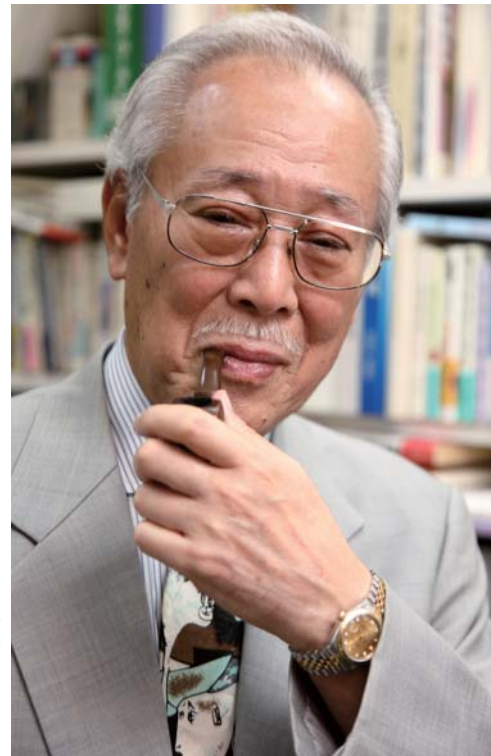
●「エンビツ工房」真島事務所
株式会社イグザミナ 代表主幹
真島 弘さん —文学部 1956年卒業—

「企業にも人にも歴史がある」と語る真島弘さんは、関西の企業の歴史と財界人の人となりを書き、関西圏からの情報を発信し続けてきた。新聞記者時代から、「北新地をわが庭と心得て、蔵の一つや二つは飲んでしまった」と言うくらい、人と付き合い、大阪のまちを愛してきた真島さんの、関西の経済界と活字文化への思い入れは深い。

水都大阪の川と橋を背に、たばこをくわえた真島さん。そのたたずまいは絵になる。パイプを72本所蔵しているというダンディな真島さんは、大阪市の三津屋に生まれ育ち、川と橋の思い出が数多くある。小学校6年生で終戦を迎えた夏、神崎川で釣った魚が貴重な蛋白源となった。中学時代には神崎川の橋の上から飛び込み、高校時代には桜宮の銀橋(桜宮橋)からダイビングを敢行して、警官に大目玉を食らったという。



真島さんは旧制中学の最後の学年に所属し、途中から男女共学の新制高校に移った。今宮中学と大阪市立南高校では、後に芥川賞を受賞する作家の庄野潤三氏(1921~2009)が教鞭を執っていた。真島さんは庄野先生から、「君は新聞記者に向いている」と言われた。後年、「もの書きになれ」とも言われたそうだ。「私は、教育制度の改変で後輩ができなかった世代です。そのおかげで反骨精神が育まれたと思います。強制的に転校させられた南高校で、先輩の女子生徒に誘われて、放課後はミナミのダンスホールに通いました。ただ、当時は医者志望でしたから、勉強するつもりで茨木の春日丘高校に転校したのです。ところが、都会育ちの私はすでに大人の世界を知っており、麻雀、花札などを生徒に手ほどきしたため、不良と目されて、学校側から風紀委員を押しつけられました。卒業するころには医者には



真島 弘—まじま ひろし
■1934(昭和9)年、大阪府生まれ。56年関西大学文学部新聞学科卒業。産経新聞大阪本社入社。80年に退社し、「エンビツ工房」真島事務所を設立。経済ジャーナリストとして活動し、多くの著書を執筆。テレビのコメントーターも務める。87年9月刊の月刊総合誌「イグザミナ」の代表主幹。

向かないと気づき、関西で唯一新聞学科のあった関西大学へ入学したのです」

学生時代は酒と麻雀に明け暮れ、中之島界隈がデートスポットとなった。新聞学科では、中井駿二教授(故人)の教えを受けた。産経新聞社に入社してからも、中井教授とは北新地へ飲みに行くこともあった。北新地といえば、桜橋にあった産経新聞社から目と鼻の先。若くして、経済界、色街で勇名を馳せることになった。

「連日連夜、はしご酒して午前様。翌日は新聞記者としての取材活動に精を出していたわけですから、若さと体力のたまものでした。野次馬根性が経済記者に向いていたのでしょうか。夜勤の日以外は、ほとんど社には上がらず、北新地を徘徊して、バーやクラブで経済人と交流を深め、酒を飲むのが仕事でした」

真島さんは、酒の席であいさつした財界人の経歴などを入念に調べ上げ、夜討ち朝駆けでニュースを追った。その記事は産経新聞の紙面だけでなく、「財界」「経済界」「東洋経済」などの経済誌にも載った。やがて、デスク、部長を務め、1980年に退社。「エンビツ工房」真島事務所を設立。経済ジャーナリストとして活動し、多数の本を執筆、テレビやラジオにも出演した。1987年9月には、経済主体の総合雑誌の分野に乗り出し、月刊「イグザミナ」を創刊。「検証」を意味するこの雑誌は、経済も出版も東京一極集中が進むなか、四半世紀近くも継続している。真島さんは代表主幹として、常に健筆を振ってきた。企業の東京志向はますます加速しているが、関西から情報発信を続ける姿勢は崩さず、自ら「生涯の道楽」と言いつつ、信念を貫こうとしている。



真島さんが四半世紀近く発行している「イグザミナ」